

精神分裂病者の与える平凡反応の特徴

筑波大学心理学系 伊藤 宗親

Characteristics of the Rorschach popular responses in schizophrenic patients

Munehika Ito (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purposes of the present paper are to investigate 1) the frequencies of the Rorschach popular responses in schizophrenics ($n=68$), 2) the distribution of the determinants used in the responses and 3) the relation of the E.B.-style and the responses. The results were as followings: 1) "bat", "butterfly" (on card I, V) and "four-legged animal" (on card VIII) were the robust popular response in the schizophrenics. Second, the schizophrenics tended to use determinants based on from (F) and three-dimensionally-perception, especially movement (M, FM) on the popular response. Third, the frequency of the popular response was significantly different between the E.B.-styles ($p<0.05$).

Key Words: the Rorschach, popular response, determinant, schizophrenia.

はじめに

ロールシャッハ法における平凡反応(P反応)は、多くの人と与える反応であり、慣習的反應様式を承認する努力の指標である点では研究者間で一致を見ている。周知のように、平凡反応は特定の反応領域に特定の反応内容を知覚したか否かによって決定される。例えば、カードIの全領域に「チョウ」を反応として与えれば、それは平凡反応とみなされる。にもかかわらず、その基準をめぐっては研究者によって様々であり、現在までのところ明確な定義づけがなされていない。加えて、用いるスコアリング体系によって、ある体系では平凡反応であるものが、異なる体系では平凡反応とはみなされない場合がある(各体系における平凡反応の差異に関しては、秋谷(1989)を参照されたい)。

このように、基準が曖昧ではあるものの平凡反応は、実践において精神分裂病の鑑別診断上、非常に有効であることが知られている。片口(1974)は、「 $P \leq 3$ の場合には、一応、分裂病を疑ってよい」としており、他のスコアリング体系においても総反応数との関連など条件つきではあるものの、平凡反応の少なさが鑑別診断のための一指標となることを報告

している(例えば、Weiner, 1966)。しかしながら、Loosli-Usteriが指摘したような、精神分裂病者の中には比較的多くの平凡反応を与える者も存在するという知見(Bolzinger, 1982)は日常の臨床経験に照らしてうなずけるものである。また、Peterson and Horowitz (1990)は、平凡反応には $\times + \%$ やWsum6(エクスマナー法による)以上の鑑別力はないことを実証している。Bolzinger (1982)は平凡反応について投影ではなく、知覚活動の心理学的意味の理解を強調しているが、このように考えると、精神分裂病者において平凡反応は真に平凡な反応となっているのかという問題が提起され得よう。

ところで、多くのスコアリング体系において、平凡反応はRorschach自身をもっとも重視した決定因とは無関係にスコアされる(ただし、Beck (1961)は形態水準が+であることを条件としてつけている)。わが国でもっとも普及していると思われる片口法では、「Pは反応の基礎概念を対象とするものであり、決定因や明細化などの条件は度外視することを原則」としている。唯一の例外としては、Klopper法を挙げることが出来る。Klopper法では、平凡反応のうちの4つには必要条件として決定因が含まれている。例えば、カードIIIのD2領域に人間像をみた

としても、その人間が運動をしていなければ平凡反応とはならないのである。

Klopferのように決定因を平凡反応の必要条件とみなさないまでも、平凡な基礎概念に対してどのような体験の意味づけを与えるかということは、重要であると思われる。とりわけ、精神分裂病の場合には公共性の高い事象に対してどのような体験をそこに意味づけるかを検討することは有用であると思われる。

また、平凡反応において決定因を重視する別の理由がある。Lazarus (1949)は、図版のすべてを無彩色にした場合、平凡反応の数が若干増加することを報告し、Exner (1959)もカードによっては無彩色という特性が平凡反応の形成に重要な役割があることを示唆している。わが国でも、松江・石川・加藤・東原・安田・小川・秋谷(1989)によって、日本人に特有とされる「花反応」(カードⅧの平凡反応)の形成において、有彩色の因子が重要な役割を担っているとの報告がなされている。色彩という刺激特性とそれを反応構成に含むかどうかは別問題ではあるが、反応領域および反応内容以外の要因の考慮も必要となろう。

他方、2次元の図版に対して運動という3次元の要素を加える運動反応(例えば、「コウモリが飛んでいる」など)は、「認知者自身の生活体験の中の何かを、事物の認知や理解の中へ持ち込むことによって、自身の生活体験や感情を、認知される事物のそれらと融合させる要因を意味し、或いはそれと深く関連していることは偶然ではない」(Schachtel, 1966, 空井・上芝, 1975)と思われる。日比(1969)は精神分裂病者を対象とした研究で、平凡反応と人間運動反応は、相互に影響を及ぼしていることを示唆している。

このような理由から、平凡反応と決定因との間に何らかの関係を想定することも可能であろう。そこで本研究では、平凡反応が実際どの程度産出されるのか、平凡反応に与えられるその決定因はどのような分布を有するのかに関する資料を得ること、また、重要な決定因によって構成される体験型のタイプと平凡反応数との関連を検証することによって精神分裂病者の与える平凡反応の特徴を検討する。

方法

A 対象

日常の臨床活動のなかで得られたロールシャッハ記録のうち、精神科医によって精神分裂病と診断され、かつ他の精神的疾患を有してはならず、施行

時にねむけ等の副作用を呈してはいない者68名(男性44名・女性24名、年齢15歳から70歳)の記録を対象とした。なお、平均年齢は39.1±13.4歳であった。

B 手続き

ロールシャッハ法の施行法・整理法は片口式によった。従って、本研究における平凡反応その他の基準はすべて片口(1974)に準拠している。なお、対象となったロールシャッハ記録は、すべて'92年7月から'95年3月にかけて実施されたものである。

結果および考察

A 各平凡反応の出現頻度

まず、平均総反応数は16個、平均平凡反応数は3.9個、平均P%は27.9%であった(Table 1 参照)。精神分裂病者において総反応の約1/4を平凡反応として産出している。P反応数毎に人数の分布を見ると(Fig. 1 参照)、Pが4以上5未満の者が最も多く、3以上4未満の者が次いで多くなっている。平凡反応は総反応に占める割合(P%)よりも実数(P)を重視する(片口, 1974)が、Pの平均値(3.9)も片口(1974)の指摘した3を上回っている。また、Pが3より多い者は40名であり全体の約59%に上る。これらの結果はすべて、平凡反応がそれ自体のみで精神分裂病の鑑別に有用であるとの知見を否定するものであり、Peterson, C.A. & Horwitz, M. (1990)の結果を裏付けているといえよう。さらに、Pが5以上の者が29名で全体の約43%を占めているという結果は、全体として平凡反応が精神分裂病においても平

Table 1 総反応数・平凡反応数およびP%の平均値

	総反応数(R)	平凡反応数(P)	P%
平均値	16.0	3.9	27.9
S D	8.7	1.7	13.8

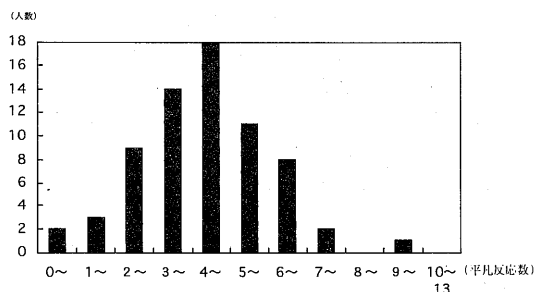


Fig. 1 P反応数からみた人数の分布

凡な反応であり得るといえよう。

次に、13個の平凡反応の内容それぞれについてその出現頻度を検討する(Table 2, 3参照)。これらのうち、Rorschachの「3人に1人以上」(33%より大)という基準を満たしたものを出現率の高い順に並べると、「四足獣」(カードⅧ)・「チョウ」(カードⅤ)・「コウモリ」(カードⅠ)・「人間」(カードⅢ)・「チョウ」(カードⅠ)・「コウモリ」(カードⅤ)であった。これら6つの反応は、精神分裂病というサンプル集団においても平凡反応の基準を満たしていることから、平凡反応としては非常に頑健であり、疾病によらない普遍的な反応内容である可能性が考えられる。特に、カードⅠおよびⅤの「チョウ」と「コウモリ」は、カード間でその出現頻度が逆転するものの、両カードとも指定された2つの平凡反応が精神分裂病者においても容易に産出され、それぞれ高率で出現していることから、カード毎の平凡反応の定義としては妥当なものであると思われる。

これらとは対照的に、片口やHertzの「6人に1人」(17%未満)という基準をも満たさないものを出現率の低い順に並べると、「毛皮類」(カードⅣ)と「花」(カードⅧ)・「四足獣」(カードⅦ)・「毛皮類」(カードⅥ)・「人間」(カードⅡ)であった。これらは健常者において高頻度でみられるにもかかわらず、

精神分裂病者においては少ないことから、むしろ鑑別の一助となるのではないだろうか。特に、カードⅣおよびⅥの「毛皮類」は各カードに唯一の平凡反応であるにもかかわらずその出現率は低い。さらに、これら5つの平凡反応は、それらの各カード特性に陰影ないしは有彩色という特性を有している。出現頻度の高い平凡反応では、その各カード特性のほとんどが無彩色であったことから、Lazarus(1949)が指摘したような平凡反応とカードの刺激価との関連が精神分裂病者に特に当てはまることが示唆されよう。

次に、カード毎に平凡反応の出現率を検討する(Table 4参照)。これは各平凡反応毎の出現頻度に依存すると思われるが、精神分裂病者の平凡反応産出傾向と各カードとの関連を理解する上で有用であると思われる。周知のように、平凡反応はカード毎に平凡反応として指定されている数が1つのものと2つのものと異なっている(カードⅨおよびⅩを除く)。カード間の比較を行う場合、これらを同質に扱うのは不公平であろう。そこで、2つの平凡反応が指定されているカードについては、そのカード内の総平凡反応数を2で除した値を検討の対象とした。最も出現頻度の高いのはカードⅢであった(33.0)。カードⅠおよびⅤの「チョウ」「コウモリ」

Table 2 片口(1974)による平凡反応のリスト

カードNo	反応領域	反応内容	備 考
Ⅰ	W・W	チョウ	チョウのうちに、ガを含む。
	W・W	コウモリ	
Ⅱ	W・W	人 間	D ₃ を「頭」と見た場合に限る。WはD ₂ のカットが一般的。
	W・D ₁	四 足 獣	クマ・イヌ・ブタなど。WはD ₂ かD ₃ のカット。
Ⅲ	W・W	人 間	WはD ₁ とD ₃ のカット、D ₂ を「人間」と見た場合もP。
Ⅳ	W・W	毛 皮 類	
Ⅴ	W・W	コウモリ	Wはd ₂ のカット。
	W・W	チョウ	Wはd ₂ のカット。チョウのうちにガを含む。
Ⅵ	W・W	毛 皮 類*	WはD ₁ のカット。
Ⅶ	W・W	人 間	Wはd ₂ のカット、またD ₆ のみの「人間」もP。
	D ₂	四 足 獣	イヌ・ライオン・ゾウなど、D ₁ を「頭」と見ても、D ₄ を「頭」と見てもよい。
Ⅷ	D ₁	四 足 獣	ヒョウ・ライオン・クマ・カメレオンなど。
	D ₂	花*	「花」そのものに限る。
Ⅸ			
Ⅹ			

Table 3 平凡反応の出現頻度

カードNo	反応内容	出現頻度	出現率(%)
I	チョウ	24	35
	コウモリ	37	54
II	人間	10	15
	四足獣	18	26
III	人間	33	49
IV	毛皮類	3	4
V	コウモリ	23	34
	チョウ	40	59
VI	毛皮類	9	13
VII	人間	13	19
	四足獣	7	10
VIII	四足獣	41	60
	花	3	4
IX	なし		
X	なし		

Table 4 カード毎にみた平凡反応の平均出現頻度

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
P	30.5	14.0	33.0	3.0	31.5	9.0	10.0	22.0	なし	なし

が高い出現頻度を有するにもかかわらず、カード毎でみた場合にカードIIIより出現頻度が低くなる理由としては、カードIIIに平凡反応を与えた者はカードIおよびVのそれぞれにおいて、2つの平凡反応を産出しないということが考えられる。もっとも、これは精神分裂病者の総反応数がもともと少ないことも影響している。

また、順序などの効果は認められなかった。ただし、前述したように、刺激価として陰影因子を強く有するカードにおける平凡反応の出現頻度は、低いといえないであろうか。

B 平凡反応における決定因の分布

平凡反応に用いられる決定因は形態反応が最も多いことが認められた(Fig. 2 参照)。これは、従来から指摘されているように、精神分裂病は図版の基本的特性である形態を用いるといった最も労力の少な

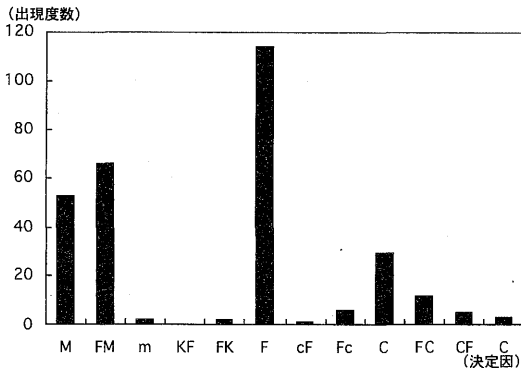


Fig. 2 平凡反応における決定因の分布

い方法で反応を認知しているといえよう。

また、3次元知覚を基礎とした決定因(M, FM, m, KF, FK)のほうが、色彩・陰影に基づく決定因(cF, Fc, C, FC, CF, C)よりも出現度数が多いという結果を得た。特に、人間運動反応(M)および動物運動反応(FM)が多く、精神分裂病者が平凡反応に与える決定因のうち、運動を知覚した反応が多いと思われる。これは、精神分裂病者の内的想念が豊かであることを反映していると考えられよう。

しかしながら、すべての精神分裂病者がそうであるとは限らないであろう。そこで、片口やKlopferの $P \leq 3$ という基準をもとに、Pが3以下である者とPを3より多く産出した者との間で、MおよびFMの間でその出現度数の差異を検討した。Wilcoxon's rank sum 検定の結果、Mについては、Pが3より多い者のほうがPが3以下の者に比して有意に出現度数が多いという結果を得た($z = 3.90, p < 0.0001$)。また、Pが3より多い者のほうがPが3以下の者よりも有意にFMの出現度数が多いことが確認された($z = 3.16, p < 0.005$)。これらの知見は、精神分裂病者において平凡反応を多く与え得る者とそうでない者との間に、観念活動の活発さに差異があることを示唆していると思われる。とりわけ、Mに関してはその解釈仮説の1つに共感性が挙げられており、その前提として、共通概念を認知する能力を反映するPの存在を考えることができよう。

次に、色彩・陰影をもとにした決定因については、その出現度数が全体として少ないという結果を得た。精神分裂病者においては、基礎的な概念に対しても外界からの刺激を取り入れることが困難であると思われる。先に述べた、有彩色・陰影因子を有する図版とそうでない図版との平凡反応の産出率の差異を考慮すると、体験として取り入れられないというよりもむしろ色彩、陰影など図版もつの刺激特性

そのものを認知することが困難であると思われる。松枝ら(1989)が指摘したようにPの産出に刺激特性が影響を及ぼしていると考え、上述のことは支持されると思われる。また、このような知見はBreuler (1911)が精神分裂病の基本症状の1つと考えた感情鈍麻と関連があるのではないだろうか。

ただし、色彩・陰影因子を基にした決定因においては無彩色刺激(C)を取り入れた反応の出現度数が比較的多くみられた。もともと、図版自体黒色部分が多く、平凡反応の出現率の高い反応内容(「コウモリ」など)は黒色という特徴を自然な形で有していることがその一因として考えられよう。また、症状との関連からみた場合、無彩色の解釈仮説には不安や抑うつ感を反映することが挙げられるが、黒色は有彩色よりも内的に意味づけされがなされることもあり、精神分裂病者は黒色に対しては親和性を有しているのではないかと思われる。

C 平凡反応と体験型との関連

ロールシャッハ法の最も重要な指標の1つである体験型は、人間運動反応と有彩色による色彩反応から構成されている。先に、平凡反応と各決定因との関連を検討したが、被検者の全体的傾向と平凡反応との関連をみるために、体験型のタイプによって平凡反応の産出率がどのように異なるのかを検討した。さらに、平凡反応は総反応数に影響を受けるともいわれていることから(Beck, 1954)、P%についても検討を加えた(Table 5 参照)。

平凡反応の出現頻度については体験型のタイプによって有意に異なることが認められた($p < 0.05$)。多重比較の結果、タイプ間に有意な差はみられなかったが、両向型が平均して最も平凡反応を産出しており、両貧型が平均して最も平凡反応の産出が少なかった。サンプル数が少なく断言はできないが、心的エネルギーが活発であるほど平凡反応が産出さ

れる傾向が考えられる。

また、総反応数に占める平凡反応数(P%)の割合についても体験型のタイプによって有意に異なることが認められた($p < 0.001$)。多重比較の結果、両貧型は両向型よりも有意にP%が高いことが認められた($p < 0.01$)。これは、総反応数の少なさを考えあわせると、決定因が形態反応優位な認知をしているほど平凡反応ばかりを産出していることが窺える。見やすいものばかりを見ており、このような精神分裂病者においては生産性が低下していると思われる。

以上、精神分裂病における平凡反応の特徴を検討してきたが、対象数も少なく、今後サンプル数を増やすとともに対照群との比較から他疾患および健常者との関連や症状間の比較からみた検討を行いたい。また、平凡反応の定義に関しても文化的要因(例えば、岩井, 1994; Mattlar, Carlsson & Forsander, 1993)などが指摘されているが、さらに疾患に特有な平凡反応などについても検討を加えたい。

要約

本研究において、精神分裂病者68名のロールシャッハ記録より、平凡反応の特徴が検討された。その結果、カードⅧの「四足獣」、カードIおよびVの「チョウ」「コウモリ」などは平凡反応として頑健であることが示された。また、平凡反応産出に用いられる決定因に関してその分布が検討された。形態反応や運動反応が多いことが示され、それを精神分裂病の症状との関連から検討された。加えて、色彩・陰影因子を精神分裂病者は反応に取り入れるのが困難であることが示唆された。また、体験型のタイプと平凡反応産出との関連が検討された。

引用文献

- 秋谷たつ子 1989 平凡反応の特集に際して ロールシャッハ研究, 31, 1-5.
- Beck, S. J., Beck, A.G., Levitt, E.E. & Molish, H.B. 1961 *Rorschach's Test I. Basic Processes (3rd. Ed.)* New York: Grune & Stratton, Inc.
- Bolzinger, A. 1982 Intérêt des réponses banales au test de Rorschach. *Bulletin de Psychologie*, 35, 295-298.
- ブロイラー・E.・飯田真ら(訳) 1974 早発性痴呆または精神分裂病群 医学書院(Breuler, E. 1911 *Dementia Praecox oder Gruppe der Schizophrenien*. Leipzig und Wien: Franz Deuticke)

Table 5 各体験型における平凡反応数およびP%の平均値

	内向型 (n=15)	外拡型 (n=7)	両向型 (n=9)	両貧型 (n=37)	
P	3.7	2.4	5.3	3.7	*
P%	15.5	17.7	17.3	33.3	**
			└──────────┘		
			$p < 0.01$		

注) *はH検定で $p < 0.05$ であったことを示す。

**はH検定で $p < 0.001$ であったことを示す。

多重比較はU検定を用いRyan法を適用した。

- Exner, J.E. 1959 The influence of chromatic and achromatic color in the Rorschach. *Journal of Projective Techniques*, **23**, 418-425.
- 日比裕泰 1969 精神分裂病のロールシャッハ平凡反応に関する研究—主として運動反応との関連—*ロールシャッハ研究*, **11**, 41-56.
- 岩井昌也 1994 包括システムによるロールシャッハテスト・平凡反応の基礎研究 上智大学臨床心理研究, **18**, 99-106.
- 片口安史 1974 新・心理診断法 金子書房.
- クローパー, B.・デヴィッドソン, H.H.・河合隼雄(訳) 1964 *ロールシャッハ・テクニック入門* ダイヤモンド社 (Klopfer, B. & Davidson, H.H. 1962 *The Rorschach Technique — An Introductory Manual —* New York: Harcourt, Brace & World, Inc.)
- Lazarus, R.S. 1949 The influence of Color on the protocol of the Rorschach test. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **44**, 506-516.
- 松枝加奈・石川雅子・加藤紀子・東原美和子・安田理恵・小川俊樹・秋谷たつ子 1989 平凡反応の時代的・文化的変化 *ロールシャッハ研究*, **31**, 23-42.
- Mattlar, C., Carlsson, A. & Forsander, C. 1993 The issue of the popular response : definition and universal vs. culture-specific popular responses. *British Journal of Projective Psychology* **38**, 53-62.
- Peterson, C.A. & Horwitz, M. 1990 Perceptual robustness of the nonrelationship between psychopathology and popular responses on the Hand test and the Rorschach. *Journal of Personality Assessment*, **54**, 415-418.
- シャハテル E.G.・空井健三・上芝功博(訳) 1975 *ロールシャッハ・テストの体験的基礎* みすず書房 (Schachtel, E.G. 1966 *Experiential Foundation of Rorschach's Test*. New York: Basic Books Inc.)
- ワイナー I.B.・秋谷たつ子・松島淑恵(訳) 1973 *精神分裂病の心理学* 医学書院 (Weiner, I.B. 1966 *Psychodiagnosis in Schizophrenia*. New York: John Wiley & Sons.)

—1995.9.30受稿—